

都立庭園になった
岩崎家
本邸・別邸

旧岩崎邸庭園	清澄庭園
六義園	殿ヶ谷戸庭園

2018年9月28日発行 第1版

発行 公益財団法人 東京都公園協会

〒160-0021

東京都新宿区歌舞伎町 2-44-1

東京都健康プラザハイジア10階

編集 株式会社シーエスプランニング



都立庭園になった
岩崎家
本邸・別邸

旧岩崎邸庭園	清澄庭園
六義園	殿ヶ谷戸庭園



ごあいさつ

東京には9つの都立庭園があります。そのうちの4つの庭園（旧岩崎邸庭園・六義園・清澄庭園・殿ヶ谷戸庭園）は三菱財閥創業者一族で知られる岩崎家にゆかりのある庭園です。

本書では、近代から現代にかけて歴史的にも社会的にも大きく変動する中で、これらの庭園がなぜ都立庭園として残ることができたのか、また岩崎家所有時代にどのように使われ、どのような役割を果たしてきたのか、その歴史を紹介します。

皆様が現代に残る都立庭園の新たな魅力を感じ、ご理解を深めていただければ幸いです。

CONTENTS

- 04-09 岩崎家の人々と4つの庭園
- 10-19 旧岩崎邸庭園
- 20-27 清澄庭園
- 28-35 六義園
- 36-43 殿ヶ谷戸庭園
- 44-45 岩崎家の遺した4庭園とゆかりの地

表紙／旧岩崎邸庭園

口絵／六義園

写真撮影／鈴木一正

本書は都立庭園で開催したパネル展「岩崎家ゆかりの都立庭園歴史紹介展～岩崎家が残したもの～」を再編集して構成しています。

岩崎彌太郎の大志と庭への憧憬

「日本列島はわが庭の内にあり」

三菱財閥の創業者岩崎彌太郎は天保5年(1835)、土佐の井ノ口村(現在の高知県安芸市井ノ口)に生まれた。その生家は今も保存され、彌太郎が青年時代につくった庭には、日本列島をかたどった石組が残っている。彌太郎はそれを眺め、「日本列島はわが庭の内にあり」と自らに天下雄飛の志を誓ったという。

彌太郎、わが国の海運業を制す

彌太郎は慶応3年(1867)、土佐藩長崎商会主任に任じられ、蒸気船や武器の輸入と土佐産品の輸出にあたる。その後、大阪に転勤し明治3年(1870)、藩船を借り受け、海運業を営むために九十九商会を設立した。彌太郎は「これからの日本は海運と貿易を興すことが第

一」(『岩崎彌太郎伝』より)と唱え事業に邁進。社名を三川商会、さらに三菱商会と改称し、明治7年(1874)には本社を東京へ移し、三菱蒸汽船会社とした。

この年、彌太郎は新興ながら台湾出兵の輸送を担う。これが一大転機となり、明治8年(1875)には計40隻余の船隊を擁してわが国海運業の王座に就いた。

庭を趣味とした彌太郎

井ノ口の生家の庭の石組は、彌太郎の壮大な志を表すものであるが、もうひとつ彌太郎の庭好きを物語るものでもある。彌太郎は次のように述べている。

「わが心は溪山丘壑を愛す。事業上憂悶を感じる時は立派な庭園を見に行く。心気は忽ち爽快になり、鬱を散ることができる。他に特別の趣味もないが、これが余の唯一の趣味である」(『岩崎彌太郎伝』より)

加賀の庭を好み、石を愛す

彌太郎は自らの庭の好みについてこう述べている。

南茅場町の三菱蒸汽船会社本社と社員(明治10年頃) (三菱史料館提供)



岩崎家の人々と4つの庭園

東京に進出した頃の岩崎彌太郎 (三菱史料館提供)



彌太郎がつくった庭。日本列島を大観する石組に天下雄飛の夢を託した。(安芸市提供)

「向島の佐竹邸は名園であるが、人工の美のみで天然の妙趣に乏しい。加賀前田侯の庭園は無数の巨石を配置し、老樹これに點綴し、豪宕にして深山幽谷の趣がある。もし自分が庭園を造る時があれば、かくの如きものに倣はんと思ふ」

庭を愛した彌太郎はなかでも石を愛した。庭園の修築に際しては人を派遣し、各地の石を集めた。よい石が見つかったという知らせに対する返書が残っている。

「御手紙相達、庭石御取請の上、太湖石十個御買取の旨致承候。右は窓外の竹蕉の間に位置するに宜しく、弘大の池畔砌中に撒布羅列するに不適なり。当地に美濃石は珍重すると聞く、定めて御申越のものは篠島、佐久間辺より出品なるべきか。我輩思ふに木曾川筋にて川石を取り下し候ては如何。必ず巨大の好品可有之かと存候。(後略)」(いずれも『岩崎彌太郎伝』より)



彌太郎の生家。右手の竹垣の先に庭がある。(安芸市提供)



彌太郎生家 平面図
彌太郎の石組がある庭は6×5mほどの広さである。弟の彌之助、長男久彌もここで生まれた。父の彌次郎は地下(じげ)浪人であった。(安芸市立歴史民俗資料館提供)

彌太郎の夢を継いだ岩崎家の人々

彌太郎、大名屋敷跡を買う

海運業の王座に就いた彌太郎は、明治10年(1877)の西南戦争の輸送も一手に引き受け、巨万の富を得る。この年の事業利益は、当時の東京市の年度予算を超えていた。それを資金に彌太郎は事業拡大の一方、もうひとつの夢である庭園の実現へ踏み出した。

明治維新による武家社会の崩壊にともない、主を失った大名屋敷は荒廃していた。彌太郎はそうした大名屋敷跡を購入した。明治11年(1878)のことである。

彌太郎が購入した大名屋敷跡

越後高田藩榊原家中屋敷
→岩崎家茅町本邸→旧岩崎邸庭園

下総国関宿藩主久世大和守下屋敷→
深川親睦園(岩崎家深川別邸)→清澄庭園

柳澤吉保別邸 六義園
→岩崎家駒込別邸→六義園

仕上げは彌之助、久彌に

彌太郎は明治13年(1880)に深川親睦園の造園が一段落したあと、茅町本邸に移り住む。しかし病魔に倒れ、明治18年(1885)に50年の生涯を閉じた。

没後、彌太郎の夢は弟彌之助と長男久彌に引き継がれる。母美和は手記に、「彌之助は予ねて兄の趣意を一つ一つ仕上げたすと申す事にて、一番に駒込(六義園)の鴨池を始め、深川(清澄園)へは国々の石を集めて庭を始め……」と記している。『岩崎彌之助伝』より

長男久彌はその後、茅町本邸を新築し、深川別邸に小亭を設けている。

現在に残された庭園

かつての岩崎家本邸・別邸のうち、深川別邸(清澄庭園)は大正13年(1924)、六義園は昭和13年(1938)、久彌によって東京市に寄付されている。第二次世界大戦終戦まで岩崎家本邸であった旧岩崎邸庭園は、曲折を経て平成13年(2001)に都立庭園として公開されている。

岩崎家の残した都立庭園としてもうひとつ、殿ヶ谷戸庭園がある。これは久彌の長男にして、本来なら三菱五代社長を継ぐはずだった彦彌太の国分寺別邸だった。

所期奉公—岩崎家のなすべき道

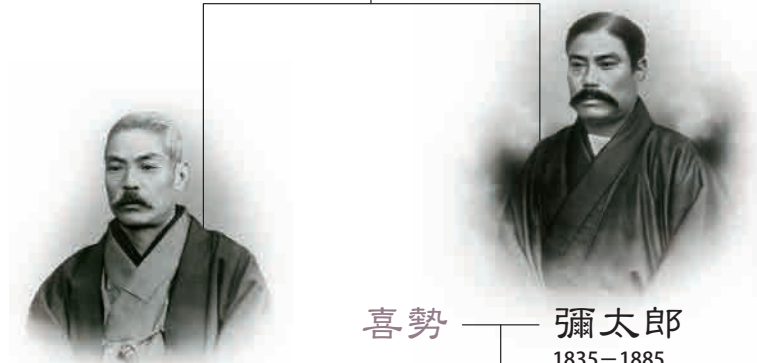
清澄庭園と六義園の寄付を受けた当時の東京市の公園課長・井下清は、久彌の決断をのちに「岩崎家のなすべき途と断定されたことであろう」[昭和31年『造園雑誌』]と記した。

東京市は記念式典を行い感謝状を贈ろうとしたが、久彌は固辞した。岩崎家のなすべき道を実践したまでとの思いだったのだろう。「岩崎家のなすべき道」とは、彌太郎から代々受け継がれてきた岩崎家の精神である。

彌之助の長男小彌太は久彌から四代社長を継いで、昭和9年(1934)に三菱の三綱領を定め、その第一を「所期奉公」とした。国家社会の公益を図ること、言葉を替えば「社会貢献」であり、岩崎家の精神である。小彌太自身も世田谷区岡本の静嘉堂文庫・庭園などを残している。

岩崎家系譜

美和 — 彌次郎



喜勢 — 彌太郎

1835-1885
(天保5-明治18)
**三菱創業者・
初代社長**
(1870-1885)
大名屋敷跡を購入し、
深川親睦園を造園するも
夢半ばで逝去。

早苗 — 彌之助

1851-1908 (嘉永4-明治41)
二代社長 (1885-1893)

彌太郎の遺志を継ぎ、
六義園を修復し、
深川別邸の造園を続け
洋館・和館を築造する。



寧子 — 久彌

1865-1955 (慶応1-昭和30)
三代社長 (1894-1916)

茅町本邸に洋館・和館を新築。
深川別邸(清澄庭園)、六義園を
東京市に寄付する。

小彌太

1879-1945 (明治12-昭和20)
四代社長 (1916-1945)

財閥解体で岩崎家最後の社長となる。
世田谷区岡本に
静嘉堂文庫・庭園などを残した。



彦彌太

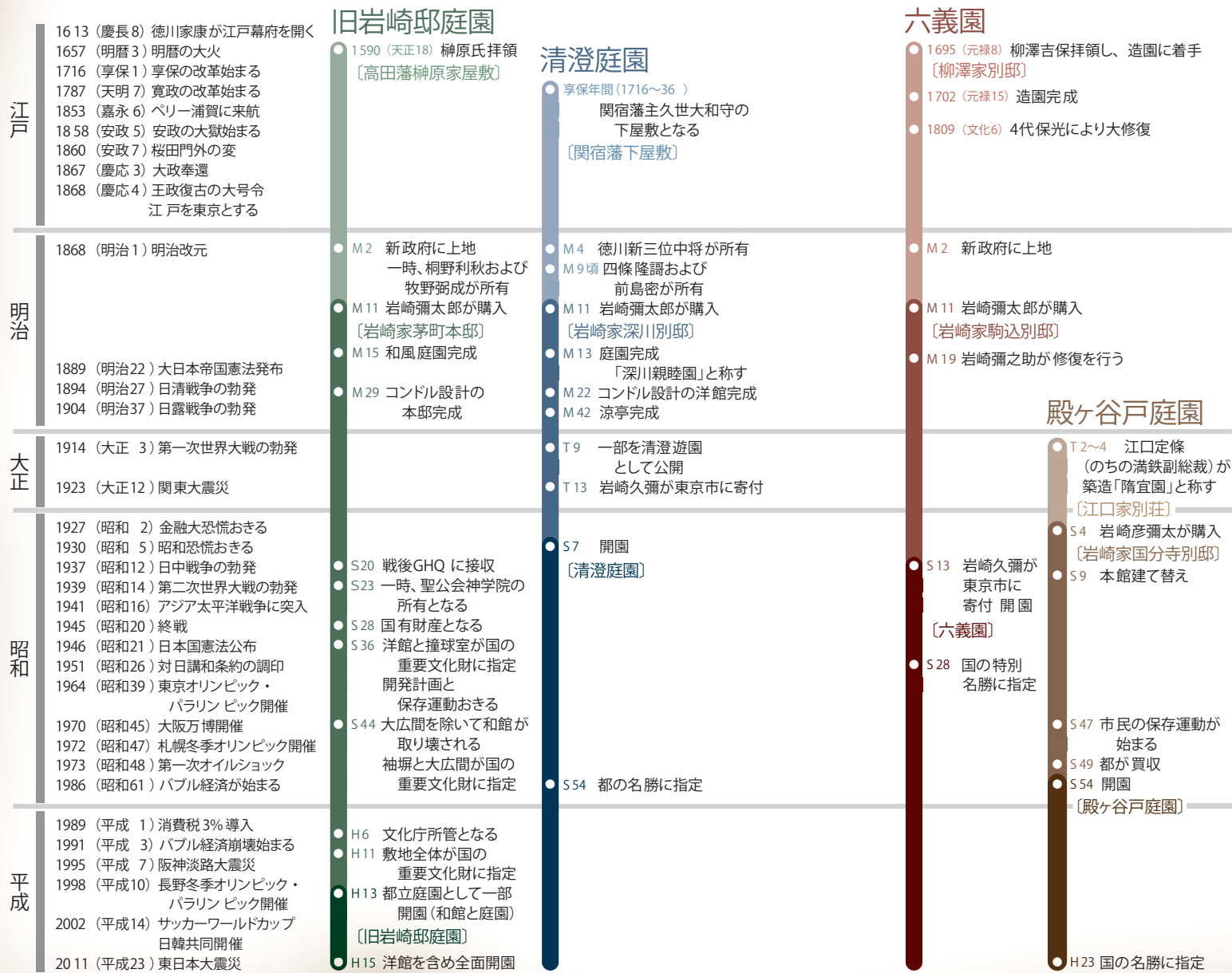
1895-1967 (明治28-昭和42)

五代目を約されていたが財閥解体で実現しなかった。
国分寺別邸が殿ヶ谷戸庭園として残る。

[肖像写真:すべて三菱史料館提供]

都立文化財庭園として存続した 岩崎家庭園の歴史

M 明治
T 大正
S 昭和
H 平成



旧岩崎邸庭園 (岩崎家茅町本邸)
 不忍池や浅草、遠くに富士山を眺める本郷の台地に作庭した和洋併置式の芝庭の庭園。越後高田藩榊原家の中屋敷跡を岩崎家が買い取り、本邸として整備。ジョサイア・コンドルの設計による洋館と撞球室、和館(大広間)が今も残る。



清澄庭園 (岩崎家深川別邸)
 隅田川と結ぶ仙台東のそばに立地した明治時代を代表する回遊式林泉庭園。閑宿藩久世家下屋敷跡を岩崎家が購入し、社員や賓客のための深川親睦園として築造。全国の名石と大泉水の景観を持つ社交場だった。



六義園 (岩崎家駒込別邸)
 柳澤吉保が五代將軍徳川綱吉より拝領した地に別邸として作庭。平坦な地に池を掘り山を築いた回遊式築山泉水庭園であり、万葉集や古今集に歌われた名所をモチーフにして景色を表現した和歌の庭である。



殿ヶ谷戸庭園 (岩崎家国分寺別邸)
 国分寺崖線の地形を利用した和洋折衷の回遊式林泉庭園。江口家の別荘庭園を購入した岩崎家が別邸として整備したもので、湧水や野草など武蔵野の自然が息づく。市民の保存運動によりその姿を今に残す。



岩崎家の人々と4つの庭園

[みどりのプラザ企画展コンテンツブックシリーズ『龍馬ゆかりの人々と5つの都立文化財庭園物語』東京都公園協会より抜粋]



旧岩崎邸庭園

（岩崎家茅町本邸）
重要文化財

久彌、コンドル設計の洋館を建て芝庭に

彌太郎時代の茅町本邸

茅町本邸は明治11年(1878)に、彌太郎が越後高田藩柳原家の中屋敷跡を購入したもの。のちに周囲を買い増し、ピーク時には1万5千坪余りに達した。当時は荒廃しており、森鷗外は小説『雁』に明治13年頃の様子を回想し、こう書いている。

「そのころから無縁坂の南側は岩崎の邸であったが、まだ今のような巍々たる土塀で囲ってはなかった。きたない石垣が築いてあって、苔蒸した石と石の間から、齒朶や杉葉が覗いていた」

彌太郎は明治15年(1882)、庭園を築造し母屋を建てて本邸とした。明治16~17年に作成された東京図測量原図によれば、泉水にいくつもの中島を浮かべた庭だったことがうかがえる。

彌太郎時代の茅町本邸

東京図測量原図(明治16~17年 参謀本部陸軍部測量局)詳細に描かれた邸内に、いくつもの中島が浮かぶ泉水が見て取れる。
(国土地理院提供)



三代就任・結婚後、本邸を新築

二代社長彌之助の指示で5年間米国に留学した久彌が帰国したのは、明治24年(1891)のこと。直ちに副社長になり、明治27年(1894)には彌之助を継いで28歳で社長に就いた。久彌は翌年結婚し駒込別邸に住み、茅町本邸の新築に取りかかる。

設計は英国人建築家ジョサイア・コンドルで、竣工は明治29年(1896)。それが現在の旧岩崎邸洋館と撞球室である。コンドルの代表作として名高い洋館は、17世紀英国ジャコビアン様式を基調に、ルネサンスやイスラム風のモチーフなど様々なスタイルが織り込まれている。洋館の西側には名棟梁大河喜十郎の手になる和館が併設されていた。

久彌新築後の茅町本邸

洋館の南側には芝庭がのびやかに広がり、南端に温室もあった。表門から長いアプローチをへて洋館に至る設計は大邸宅の一般的な手法。

復元平面図
(粟野隆氏作成)



洋館南面と芝庭(静嘉堂文庫提供)

久彌は洋館竣工後、彌太郎時代の庭を、広々とした芝生の周りを樹木が縁取る和洋併置式の庭に改造した。

久彌新築後の茅町本邸

CG [林洋平氏作成『緑と水のひろば』32号 2003夏より]



ジョサイア・コンドル(1852~1920)

英国人建築家にして、日本近代建築の父といわれる。明治10年(1877)、日本政府の招聘により来日し、工部大学校造家学科



(三菱地所提供)

(東京大学工学部建築学科の前身)の教師として、辰野金吾(東京駅、日本銀行設計)、片山東熊(赤坂離宮設計)、曾禰達蔵(慶応義塾図書館設計)などそうそうたる建築家を育てた。その一方、工部省顧問として上野博物館や鹿鳴館などの政府関連施設を設計。退官後も日本に留まり神田二コライ堂のほか、高官や財界富豪の邸宅建築を数多く設計した。とりわけ岩崎家との関係は深く、深川別邸、三菱一号館・二号館、茅町本邸、彌之助高輪本邸(開東閣)などを手がけた。

洋館は迎賓館、生活の場は和館

和洋併置式住宅の典型

茅町本邸は馬車回しに面した洋館と、その西側につながる、それに倍する広さの和館からなっていた。洋館は年1回の一族の集まり、外国人や賓客の接待やパーティなどに使用され、家族の日常生活には和館が用いられた。

久彌も和館に起居し、書齋は和館にもあったが、洋館1階の書齋で書物を読み来客を迎えた。和館の広間は冠婚葬祭用に用いられ、3人の娘たちのお雛様もここに飾られた。

明治後期以降の上流階級の邸宅は、このように洋館(洋風部分)を接客の場、和館(和風部分)を日常生活の場

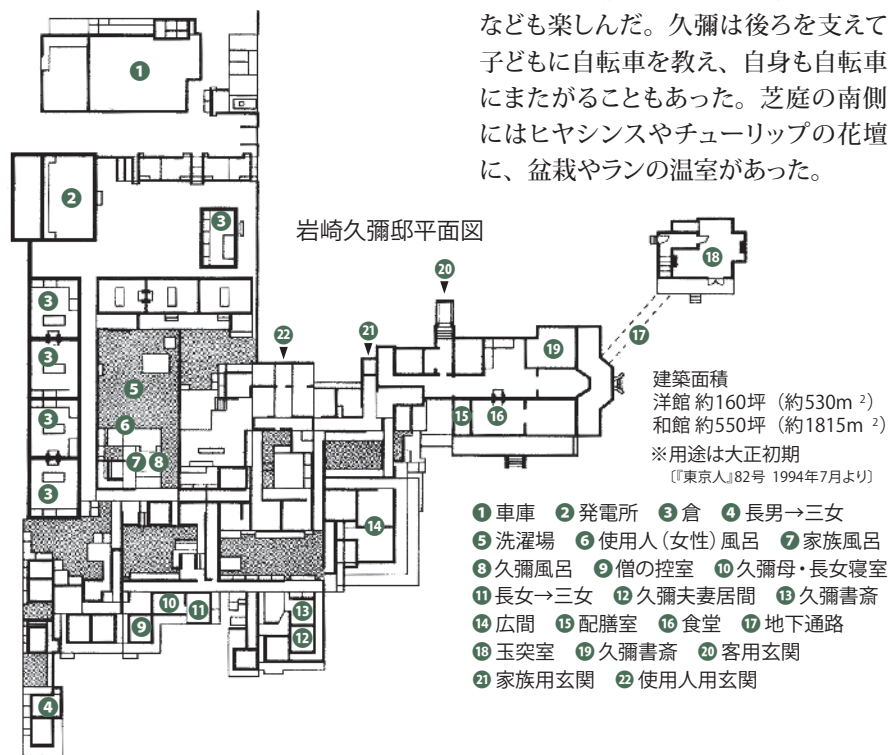
とする形式が一般的だった。いわゆる「和洋併置式住宅」である。

なお、岩崎邸ほどの富豪の邸宅になるとその運営・維持は大変で、常時50人前後の使用人がいたという。

庭で野球、サッカー、テニス、乗馬

広々とした芝生を樹木が取り囲み、その芝生や木立ちに景石や灯籠、築山がある。こうした岩崎邸の和洋併置式の「芝庭」は、近代住宅における代表例といわれるが、芝庭は子どもたちにとって格好の遊び場だった。

鬼ごっこや野球、サッカーはもちろん、西側の塀際に馬場(のちにテニスコートに改修)があり、乗馬やテニスなども楽しんだ。久彌は後ろを支えて子どもに自転車を教え、自身も自転車にまたがることもあった。芝庭の南側にはヒヤシンスやチューリップの花壇に、盆栽やランの温室があった。



関東大震災では避難場所に 庭では明治38年(1905)に催されたという園遊会が写真に残るほか、毎年、湯島天神の祭りには24カ町の神輿が招き入れられ、祝儀や菓子が渡された。

それ以外一般の人々に門が開かれる機会はなかったが、大正12年(1923)の関東大震災の際は避難民に開放され、約5千人が難を逃れたという。また、昭和20年(1945)の東京大空襲では、久彌自ら火消しの一隊にまじって焼夷弾から洋館を守り、多くの被災者を邸内に受け入れた。

大きな庭石に腰かける久彌と孫たち。後ろに灯籠が見える。



洋館のサンルームで撮影された久彌の家族写真。中央椅子に座るのが久彌。

芝庭で遊ぶ子どもたち。自動車を模した四輪車に乗っている。



ランや盆栽温室と花畑。芝庭の一番南側にあった。



園遊会の風景。明治38年(1905)の日露戦争戦勝記念のおりといわれる。



[写真はすべて静嘉堂文庫提供]

ほんろう 時代に翻弄された苦難の戦後

GHQの接收、本邸売却へ

第二次大戦中も久彌は一人本邸にとどまった。そして、昭和20年(1945)終戦。財閥解体に加え、本邸はGHQ(連合軍総司令部)に接收され、諜報機関のキャンロン機関が使用することとなる。久彌たちは「折半住居」[久彌の長女澤田美喜『黒い肌と白い心』より]を強いられ、和館の一部で暮らした。その後、財産税のためGHQに接收されたまま屋

敷全体を聖公会神学院に売却。昭和24年(1949)に久彌は本邸を去り、千葉県成田近くの末広農場に移り住んだ。

本邸は洋館をキャンロン機関が使用し、聖公会神学院は和館のうち居室を教室、大広間を説教場、撞球室を礼拝堂に使用した。その後、昭和28年(1953)までにはキャンロン機関、聖公会神学院とも立ち退き、同年、敷地建物とも政府の所有となった。



昭和44年(1969)、和館取り壊し前の旧岩崎邸
洋館の隣に完成時のままに和館の建物が続き、往時の岩崎邸の全体像を知ることができる。(朝日新聞社提供)



昭和22年の空撮

1947

昭和22年(1947)のGHQに接收されていた頃は芝生に園路も見えて取れ、岩崎邸の庭の特徴である「芝庭」が保たれている。(国土地理院提供)



昭和38年の空撮

1963

昭和28年(1953)以降は政府所有となり、研修所時代は庭がテニスコートや野球、陸上などの運動場として利用された。(国土地理院提供)



昭和44年の空撮

1969

和館の大部分を失う

政府所有となった旧岩崎邸は、最高裁判所の書記官研修所(速記者養成)となる。その後、昭和40年(1965)には春日通りに面した庭の南側部分が民間に譲渡された。次いで昭和44年(1969)頃には大広間を除いて和館の大部分が取り壊され、そこに最高裁判所司法研修所が建てられた。

研修所の時代には庭も大きく変わり、園路や芝生はなくなり、芝庭に据えられていた景石もほかの場所に移された。庭には陸上競技のグラウンドやテニスコートがつくられ、運動場として利用された。



昭和50年の空撮

1975

昭和40年(1965)に敷地南側が売却され、昭和44年(1969)頃には和館の大部分が取り壊され、司法研修所が建てられた。(国土地理院提供)



存続の危機から都立文化財庭園へ

重要文化財の指定を受けながら

旧岩崎邸は昭和40年代に入ると敷地が縮小し、和館の大部分が失われる。だが、それをさかのぼる昭和36年(1961)には、洋館と撞球室が国の重要文化財の指定を受けていた。次いで昭和44年(1969)には取り壊しを免れた大広間と、袖塀も指定を受けた。

にもかかわらず、平成に入って間もなく旧岩崎邸は存続の危機に直面することになる。庭園に清掃工場建設案が浮上するのである。以下、下表参照。

文化庁による修復後、平成15年に全面開園

旧岩崎邸庭園は文化庁が所管し、東京都が管理する文化財庭園。文化庁は平成3年度(1991)から10年以上にわたって保存事業を進め、平成15年度(2003)にひとわり修復工事を終了。同年4月1日に旧岩崎邸庭園は洋館を含めて全園開園した。修復にあたっては、金唐革の技法を和紙で実現した日本独自の「金唐革紙」をはじめ、細部に至るまで忠実に復元された。

- 昭和36年(1961) 洋館と撞球室が重要文化財に指定される。
- 昭和40年(1965) 春日通りに面した敷地が民間に譲渡される。
- 昭和44年(1969) 大広間を除いて和館が取り壊される。和館大広間と袖塀が重要文化財に追加指定される。
- 昭和46年(1971) 和館跡に最高裁判所司法研修所が建設される。
- 平成4年(1992) 司法研修所の移転が新聞報道され、庭園に清掃工場建設計画が持ち上がる。それに対して学者・文化人・市民による幅広い保存運動が起こり、清掃工場建設計画は立ち消えになる。
- 平成6年(1994) 司法研修所が和光市へ移転する。
- 平成8年(1996) 地元区、地元選出国會議員等から公園化の要請
- 平成9年(1997) 公園化へ向けての検討・調整が始まる。
- 平成11年(1999) 煉瓦塀、実測図、宅地が重要文化財に追加指定される。これにより建物と敷地全体が重要文化財となる。
- 平成13年(2001) 都立文化財庭園として一部開園(和館と庭園)
- 平成15年(2003) 洋館を含め全面開園

文化庁による修復

(3点とも『重要文化財旧岩崎家住宅(洋館・撞球室・大広間・附煉瓦塀)保存修理工事報告書』(平成17年3月・文化庁)より)

外壁塗装工事(平成7年度)



技法を含めて復元された金唐革紙(平成12年度)

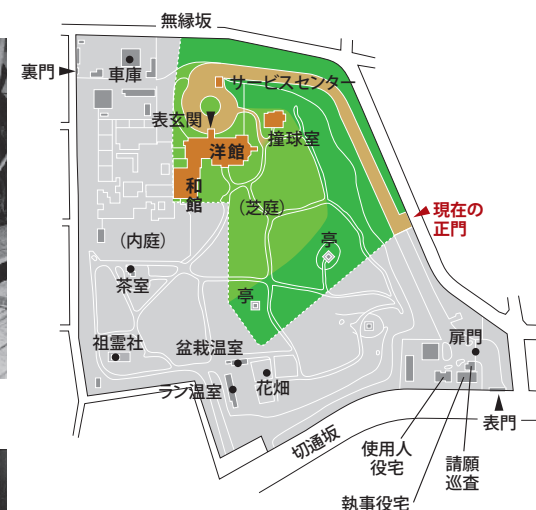


2階ベランダ手摺金物加工(平成14年度)



現在の旧岩崎邸庭園と茅町本邸時代の全体図

● カラー部分は現在 ● グレー部分は茅町本邸時代
(『旧岩崎邸庭園ガイドブック』より)



現在(写真は平成26年撮影)の旧岩崎邸庭園
右下の池之端文化センター跡は都市計画決定区域で
庭園として復元が進められている。(東京都建設局提供)





清澄庭園

(右崎家深川別邸)
都指定名勝



社員の親睦と賓客接待の迎賓館として

理想の庭園づくりに好適の地

彌太郎は明治11年(1878)に、東京市中に3カ所の大木屋敷跡を買った。なかでも深川清澄の関宿藩主久世大和守の屋敷跡は、石を愛する彌太郎の眼鏡にもっともかかっていた。

敷地は短い引込堀で仙台堀に接し、仙台堀はすぐに隅田川に通じ海につながっていた。大重量の巨石も自社の汽船を利用して曳き、容易に運び入れることができる。彌太郎は残存する風景と水運をみて、大規模な造園に好適として直ちに取得したという。

さらにこれに周囲を買い足し、約3万坪をもって造園に取りかかる。大泉水は隅田川の水を引き入れ、潮の干満によって変化する景色を楽しむ潮入

の池とした。その周りには関東や伊豆はもとより、関西や四国など全国各地から集められた名石が配された。

欧米社会のような社交の場を

庭園は明治13年(1880)に工事の一段落をもって、「深川親睦園」と名づけられ開園する。それまで政府高官や外国人の接待は、料亭での大盤振る舞いが一般的だったが、彌太郎は常々、欧米社会のような社交習慣がよいと考えていた。そこで、この庭園を賓客をもてなし、社員の親睦をはかる場としたのである。

ジョサイア・コンドルの設計で欧米風の社交場である鹿鳴館ろくめいができたのは明治16年(1883)のこと。親睦園の

本所深川絵図 嘉永5年(1852)頃
関宿藩主久世大和守下屋敷は
仙台堀から隅田川につながっていた。
(国立国会図書館提供)



東京図測量原図 明治17年(1884)
三菱会社所有地とあるのが深川親睦園。
北側に池のある屋敷がほかにもいくつか見える。
(国土地理院提供)

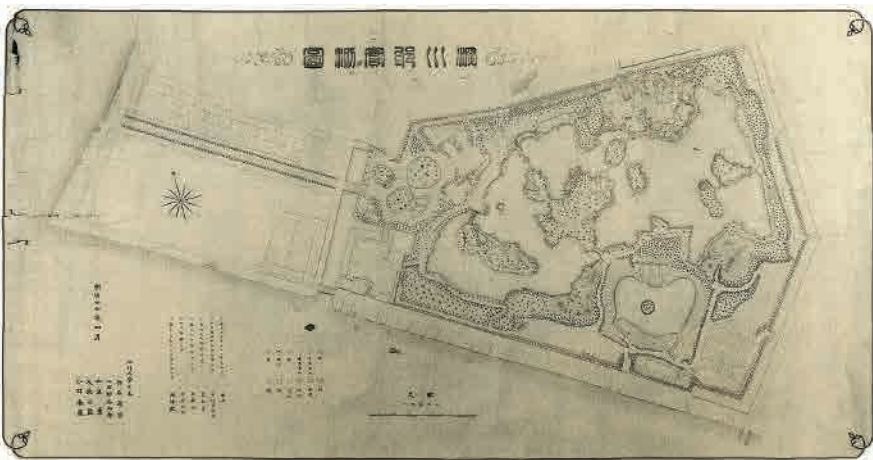


公会式目
 一 毎年春秋の両季を以て酒を親睦園に置き社員を会する者は平生の労を慰しめんと欲するなり互に礼譲を守り務めて和楽を主とし人に敬を失くす勿れ自ら咎を招く
 一 酒を置くは飲を尽すに止り専ら儉素を要す
 一 二汁五菜に過ぐべからず
 一 歌妓を召すは酒を行らむるに止る狼麩の具となす勿れ放歌狂吟人の歡を破るなれ
 一 飲酒は量りなし各其量を尽すを以て度となし人に酒を強ゆる勿れ乱に及ぶなれ
 一 集散は時を以てし後散れず
 一 右之条々我社員に示すもの也
 明治十三年四月
 岩崎彌太郎
 乙丑晩秋
 北山逸人

開園はそれに3年先立っていた。
彌太郎は利用規定をつくり、「公会式目」として園に掲げた。そこには、「放

歌狂吟人の歡びを破るなかれ」「人に酒を強いるなかれ」「乱に及ぶなかれ」などとあった。

深川別邸実測図 明治27年(1894)
この図面は彌之助による庭園完成後のもの。前頁の東京測量原図と比べ、池の形が大きく変わっているのが見て取れる。西側に延びる園路は隅田川岸へ達していた。
(三菱地所提供)



彌太郎の想いを岩崎家三代で実現



彌之助が造園を引き継ぐ

深川別邸は親睦園の名で明治13年(1880)にひとまず開園したが、庭園全体ができあがったわけではなかった。しかし、その後、彌太郎はガンを発症。思い描いたとおりの庭を完成させることなく、明治18年(1885)に生涯を終えた。

彌太郎の庭にかける想いは彌之助に引き継がれ、彌之助は深川別邸と駒込別邸の造園・修復に取り組む。母美和の手記に、「深川(清澄園)へは国々の石を集め庭を始め、そのうち深川の家(別邸)を建てることを考え、国々の材木を取寄せ」『岩崎彌之助伝』よりとあるように、彌之助は造園とあわせて洋館と日本館の建築を進めた。

池畔に和・洋、二つの迎賓館

洋館の設計はジョサイア・コンドル。赤レンガの外壁と青いスレート屋根が鮮やかな対比を見せ、庭を望む南側には美しい鉄製のベランダが配されていた。この洋館は、コンドルが最初に手がけた民間の邸宅建築だった。

CGによる
深川別邸(親睦園)の全体像
洋館・和館を含め庭園完成後の明治24年から明治41年頃を復元したもの。表門は西南の隅に位置した。
〔『清澄庭園ガイドブック』より〕

一方の日本館は河田小三郎の設計で、大広間、茶室、松の茶屋などを備えていた。

庭園は洋館と日本館が明治22年(1889)に竣工したあと、明治24年(1891)に完成をみた。

久彌により国賓歓待の小亭

深川別邸は三菱の迎賓館として使用され、ときには国賓ももてなした。彌之助を継いで三代社長に就いた久彌は、明治42年(1909)に池畔に数寄屋造りの小亭(涼亭)を新築している。これは国賓として来日した、英国陸軍元帥キッチナーをもてなすために建てられたものである。

● 洋館と涼亭と園遊風景

洋館はジョサイア・コンドルの設計で明治22年に竣工。関東大震災で日本館とともに焼失した。
〔三菱史料館提供〕



三菱社員の園遊風景。洋館の右手前で楽隊が演奏している。
〔静嘉堂文庫提供〕



涼亭でもてなし風景。広縁に椅子・テーブルが置かれている。
〔静嘉堂文庫提供〕



● 関東大震災前の庭園風景

日本館付近から富士山を望む 〔東京都公園協会蔵〕



富士山から見る池と日本館 〔東京都公園協会蔵〕



関東大震災後、庭園の半分を東京市へ

一部を児童遊園として公開

深川別邸は大正10年(1921)に東南隅の約3,000坪を児童遊園として改造し、「清澄遊園」の名で市民に公開している。このいきさつを『岩崎久彌伝』は、「久彌は同庭園(深川別邸)の公的意義及び文化財としての価値が加わるにつれ、これを社会に公開し公共施設として保存することを考えた」と記している。

久彌は庭園内部についても希望者に公開する計画を進めた。しかし、そのさなかの大正12年(1923)に関東大震災が襲う。

震災の避難者約1万人を救う

深川別邸では洋館と日本館が灰燼に帰し、石組も少なからず損壊した。しかし、樹木が延焼を食い止め、広い庭内は猛火の中を逃げまどう人々にとって救いの場所となり、約1万人が

難を逃れた。建物では涼亭だけが焼けずに残った。

庭園は西側半分のほうが被害が甚大だった。久彌は「震災復興はまず住居より」として、西側の大泉水を貯木場にし、洋館の焼け跡に製材所を設け、木材の緊急供給につとめた。

東京市へ寄付、昭和7年に開園

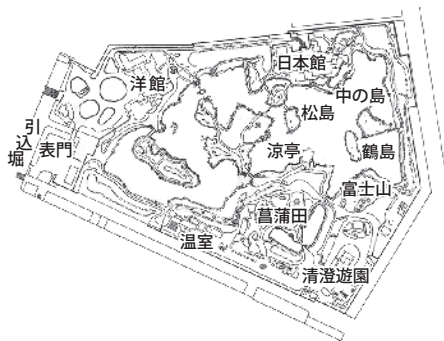
震災後の帝都復興計画は、災害時の公園・緑地の重要性を認識し、その拡大・増設を推進することとした。久彌はこれに賛同し、大正13年(1924)に損傷の少なかった東側部分15,541坪を東京市に寄付した。

これを受けて東京市は補修整備を行い、昭和7年(1932)に「清澄庭園」として開園。近代を代表する日本庭園は、今に伝えられることになった。昭和54年(1979)には都の名勝に指定されている。

関東大震災直前の深川別邸全図

東南隅に市民に公開された清澄遊園(児童遊園)が見える。

(東京都公園協会蔵)



現在の清澄庭園と関東大震災前の深川別邸

●カラー部分は現在の清澄庭園
●グレー部分+カラー部分は震災前の深川別邸当時
現在グレー部分は開放公園区域となっている。
〔『緑と水のひろば』79号2015春より〕



関東大震災直後の庭内

懸命に火を食い止めた庭木は緑のものはほとんどなかったという。石組は崩れ、灯籠も池の中に倒れている。(東京都公園協会蔵)



昭和初期の空撮に見る清澄庭園

震災復興のために庭園の西側は製材所となった。撮影は旧陸軍による。(国土地理院提供)

●開園後の清澄庭園

(昭和7~8年頃の東京市役所作成
絵葉書(東京都公園協会蔵))

中の島から見た大正記念館

竣工は開園前の昭和3年。現在の建物は平成元年に全面改築されている。



池越しに望む涼亭と富士山
涼亭は唯一残る深川別邸時代の建物で、昭和61年に改築復元されている。





六義園

(岩崎家駒込別邸)
特別名勝



柳澤吉保が和歌への造詣を傾けて 作庭した庭

万葉集や古今集の景を写して

六義園は明治11年(1878)に彌太郎が購入した3カ所の大名屋敷跡の中でも、格段に由緒のある庭園だった。この庭をつくったのは、五代将軍徳川

綱吉の寵臣^{ちようしん}として権勢を誇った柳澤吉保である。吉保は元禄8年(1695)に綱吉よりこの地を賜り、7年の歳月をかけ元禄15年(1702)に回遊式築山泉水庭園と呼ばれる見事な庭を完成させた。赤穂浪士の討入りの年である。

染井王子巢鴨辺絵図

嘉永7年(1854)頃

元禄8年(1695)に柳澤吉保が拝領した土地は、右上の「松平時之助」「加州候」と明記されたあたり。

〔国立国会図書館提供〕



六義園図

『楽只堂年録(らくしどうねんろく)』108巻(元禄15年・1702)10月21日の項にある六義園記付図。完成直後に描かれたこの図には八十八境の名が記されている。〔柳沢文庫提供〕

六義園之図(写)

柳澤吉保が完成直後に園全体の景色を狩野常信に描かせた『六義園之図』の写しである。

この絵には現在はその跡だけが残る吟花亭とその周辺が描かれている。〔国立国会図書館提供〕



名の由来となっている“六義”とは、漢詩表現の6種の形態にして、紀貫之が『古今和歌集』の序文に記した和歌の6つの風体(六義)のこと。吉保は和歌をはじめ文学に造詣が深く、『万葉集』『古今和歌集』に詠まれた名所や「中国古典」「梵」にちなんだ景観を選び、八十八境としてそれを園内に再現している。六義園が雅趣にあふれ、「和歌の庭」とも呼ばれるゆえんである。

信鴻の代には町人も御庭拝見

六義園は吉保から嗣子の吉里、孫の信鴻へと受け継がれるが、信鴻の代には興味深い利用のされ方をしている。安永2年(1773)、50歳を前に大和郡山藩主の座を嫡男に譲り六義園に隠退した信鴻は、そこでの生活ぶりを『宴遊日記』に書き残している。



水木家旧蔵六義園図

作成年は不詳。一説には普請に携わった技術者によるものと推察されている。広大な敷地に庭園と屋敷がどのように配置されていたかがよくわかる。〔柳沢文庫提供〕

それによると、自ら草や芝を刈り、花や木を植え、手入れに精を出す一方、人々を招き花見や花火、キノコ狩り、菊見など楽しんでいる。しかも、その庭を武家だけでなく、願い出れば町人や農民にも御庭拝見を許可していた。今でいうオープンガーデンである。

六義園は信鴻が没した後、しばらく利用がなく荒廃したが、文化6年(1809)に四代保光が復旧工事を実施。その後は代々の柳澤家当主の隠退後の別荘として利用され、明治維新後は政府に上地された。

岩崎家によって修復された江戸の名庭

12万坪に及ぶ広大な土地を入手

明治11年(1878)、彌太郎は六義園とその周辺の土地を入手する。当時、彌太郎所有の熱海の地所を御用邸用地として宮内省に献上し、代地として染井の藤堂家地所を下賜された経緯もあり、面積は総計12万坪(約40ha)に達した。東は本郷通りから西は白山通り、北は現在のJR山手線を越えて染井霊園に及んだ。

彌太郎の右腕でもあった川田小一郎は、この土地を見て、「『余り大きすぎるが、何に用いられるか』と彌太郎に訊ねたところ、『巢鴨から板橋まで買上げ、いづれ国家の役に立つ仕事をやってみせよう』と語ったという」(『岩崎彌太郎伝』より)。何を考えていたか明らかではないが、彌太郎の早逝でそれは実現しなかった。

岩崎家が所有した土地は、現在のJR山手線を越えて染井霊園に及ぶ広大なものだった。

「岩崎家別邸実測図」(明治32年・1899)の敷地を国土地理院1万分の1地形図に重ね合わせたもの。

〔みどりのプラザ企画展コンテンツブックシリーズ「龍馬ゆかりの人々と5つの都立文化財庭園物語」より〕



兄を継ぎ彌之助が修復を継続

彌太郎が入手した当時、六義園がどの程度荒廃していたかも、彼の在生中の修復工事の進み具合も明らかではない。彌太郎の没後は、母美和の手記に「彌之助は予ねて兄の趣意を一つ一つ仕上げたすと申す事にて、一番に駒込(六義園)の鴨池を始め……」(『岩崎彌之助伝』より)とあるように彌之助に引き継がれる。

明治19年(1886)からの修復工事について、『岩崎久彌伝』は次のように伝えている。「彌之助は新たに下総の山林(末広農場)から樹木数万本を移植し、各地から庭石を集めて往時の景観を復元した。また、園内各所に瀟洒な亭榭を建て、六義館の跡には小邸を造築した」。

明治42年(1909)の測量図にみる駒込別邸

12万坪に及ぶ広大な敷地は、明治36年(1903)開業の山手線池袋～田端間によって大きく二分された。六義園の西側にまだ鴨池が残っている。

〔国土地理院提供〕



明治38年(1905)秋の園遊会風景

彌之助と久彌が主催して明治38年10月に行われた日露戦争の戦勝祝賀会。左下の写真に海軍将校を応接する彌之助の姿がみえる(無帽の人物)。右下は園遊会の舞台。〔写真上は東京都公園協会蔵 下の2点は三菱史料館提供〕

岩崎家別邸としての六義園

三代社長となり明治27年(1894)に結婚した久彌は、茅町本邸の完成(明治29年)まで六義園の小邸を新居とした。のちに小岩井農場(岩手県)や末広農場(千葉県)の経営に傾注した久彌は、当時、別邸周りの土地で乳牛数頭

を飼育し、牛乳の生産も行っている。

駒込別邸は私的に使われた。ただ、明治38年(1905)秋、2日間にわたり大々的に園遊会が行われたのは有名である。日露戦争の勝利を祝い、彌之助と久彌が海軍将兵6千名を招待して催したものである。

久彌自ら電話をかけ東京市に寄付

周辺の所有地を「大和郷」として分譲
 大正5年(1916)、久彌は50歳にして社長の座を彌之助の長男小彌太に譲る。農牧に関心を持ち、駒込の地でも牛を飼っていた久彌は、小岩井農場や末広農場で農牧事業に取り組む。その一方、大正時代に入り東京市の住宅不足がいわれと、六義園周辺の所有地を計画的な都市開発に基づき高級住宅地として造成。大正10年(1921)に六義園が大和郡山藩邸であったことから「大和郷」と名づけて分譲した。
 また、久彌は大正6年(1917)にG.E.モリソン博士が収集した東アジアに関する膨大な資料、モリソン文庫を購入している。このコレクションを収蔵・公開するため大正13年(1924)に東洋文庫を設立。六義園東側の土地1,900坪を提供し、本館・書庫の建設にあてている。
 このように12万坪あった敷地は、六義園を残し漸次譲渡売却されていった。

昭和12年(1937)の測量図にみる駒込別邸
 昭和10年に分譲された大和郷をはじめ、岩崎家の敷地は六義園を残して漸次売却されていった。これは六義園3万坪(10ha)を寄付する前年のもの。(国土地理院提供)



昭和13年に寄付を受け、同年秋に開園
 六義園が東京市に寄付されたのは昭和13年(1938)のこと。久彌は関東大震災後、公園・緑地の拡大・増設をはかる東京市の考え方に理解を示し、大正13年(1924)の清澄庭園に次いで寄付となった。
 寄付の申し出を受けた当時の東京市の公園課長・井下清は、次のように回顧している。「翁(久彌)自ら市の係に電話をかけ、六義園を寄付したいが保存資金は何程考えたらよいか、とのことであった。係は庭だけで結構です。金などのご配慮は無用でありますと答えた」(昭和31年『庭園雑記』より)。東京市は開園式典を催し、その席で感謝状を贈りたいと申し出たが、久彌は「当然のことをしたまで」とこれを固辞した。
 六義園の開園は昭和13年10月。2年後に国の名勝、昭和28年(1953)には特別名勝に指定されている。

昭和19年(1944)の空撮にみる六義園
 陸軍によって撮影された写真である。この翌年戦災に遭い別邸時代の建物はほとんど失われたものの、名庭の遺構は現在に伝えられることになった。(国土地理院提供)



● 開園の昭和13年(1938)頃の六義園

上) 蓬莱島と熱海ノ茶屋(現吹上茶屋)
 下) 出汐湊より田鶴橋を望む

大泉水越しに熱海ノ茶屋を望む



[写真はいずれも東京都公園協会蔵]



殿ヶ谷戸庭園

（岩崎家園分寺別邸）
国指定名勝



国分寺崖線の環境を活かした別荘庭園

武蔵野の別荘ブーム

殿ヶ谷戸庭園も岩崎家別邸をへて都立庭園として残る庭園である。しかし、その成り立ちは他の3つの庭園とは異なる。大正初期につくられた武蔵野の別荘庭園を、岩崎久彌の長男彦彌太が買い取ったものである。

明治末期から昭和初期にかけて、武蔵野には数多くの別荘が構えられた。

国分寺崖線につくられた別荘

(国分寺・小金井周辺)

(地図：昭和5年 国土地理院5万分の1地形図)



国分寺崖線から富士山の眺望

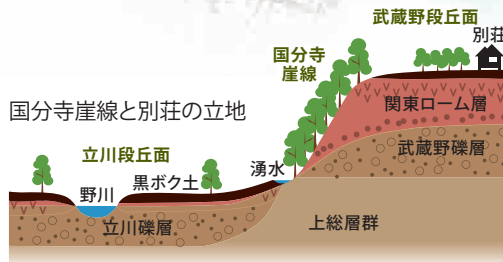
現在でも崖線上の地上から富士山を眺められるところがある。写真は小金井市中町。



その背景には欧米の生活の影響を受けた健康志向と、近代化に伴う大気汚染があった。都心部には多くの工場が建てられ、動力源として焚かれた石炭が空気を汚した。そのため、富裕層はこぞって空気のきれいな武蔵野に別荘を求めた。おりからの鉄道の整備と自動車交通のはじまりもこれを後押しした。

崖線の自然と絶佳の眺望

その別荘地として人気を誇ったのが国分寺崖線(ハケ)である。野川に沿って国分寺から世田谷にのびるこの崖線は、眼下に農村風景を眺め、富士山の眺望が絶佳であった。崖下には豊富な湧水もわいていた。別荘地としては願ってもない環境で、とくに崖線が省



南側外観

線や私鉄と交わるあたりには別荘が集中した。

中央線と交差並走する国分寺から小金井にかけての崖線には、今村邸(現日立中央研究所)、波多野邸(現滄浪泉園)、小橋邸(現はげの森美術館)など10邸以上を数えた。そのひとつが現在の殿ヶ谷戸庭園である。

江口家別邸「随宜園」として

殿ヶ谷戸庭園は大正2年(1913)から大正4年(1915)にかけて、当時の三菱合資会社営業部長で、のちに南満州鉄道副総裁をつとめた江口定條の別邸としてつくられた。江口は洒落た感じの屋根をのせた洋風の建物に、庭は崖線の自然景観を活かしたものとし、ここを「随宜園」と名づけた。庭を手がけたのは、八芳園(港区)などの作庭で知られる庭師仙石荘太郎である。

この別荘庭園が岩崎彦彌太の別邸となるのは、昭和4年(1929)のことである。

● 江口家別邸「随宜園」時代

和室(「随宜園」の額が掛けられている)



居間



別邸崖線上より望む景色



(写真はいずれも公園文庫蔵)

郊外生活を楽しんだ彦彌太家族の「国分寺の家」

本館を建て替え、紅葉亭を整備

岩崎彦彌太は大正14年(1925)にイギリス留学から帰国し、三菱合資会社に入社。昭和4年(1929)に江口家別邸を購入し、しばらくはそのまま使用した。その後、彦彌太は昭和9年(1934)に副社長に就任し、この年、数年前から着手していた津田鑿設計による本館の建て替えや紅葉亭(茶室)などの整

備を終え、回遊式林泉庭園として別邸を完成させている。

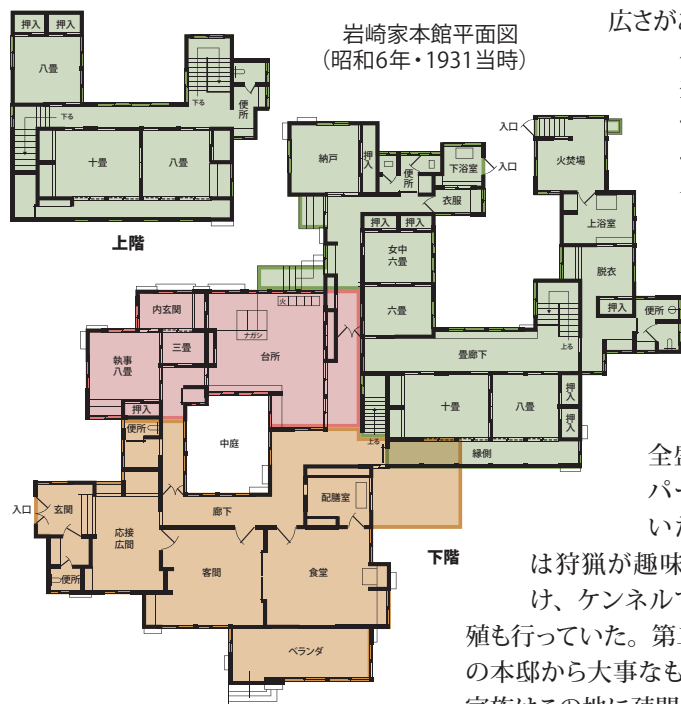
和洋折衷の本館は一部2階建てで延べ166坪、部屋数が10室以上あり、中庭やサンルームのようなベランダを備えていた。数寄屋造りの紅葉亭は、イロハモミジと崖下に湧水池(次郎弁天池)を眺める趣向だった。

全盛期にはガーデンパーティも

当初、敷地は約3.3ha(現在は開放公園を含め約2.1ha)の広さがあり、農地、鴨池、ケネル(犬舎)、湧水を利用したプールなども備えていた。南側は斜面となって野川の少し手前まで続いていた。

岩崎家ではこの国分寺別邸を「国分寺の家」と呼び、全盛期にはガーデンパーティも開かれていたという。彦彌太は狩猟が趣味でよく狩りに出かけ、ケネルで好きな犬の繁殖も行っていた。第二次大戦中は都心の本邸から大事なものを倉庫に運び、家族はこの地に疎開していた。

彦彌太は三菱本社の五代社長を約束されていたが、第二次大戦後の財閥解体政策で叶わなかった。



- 昭和36年の大規模改修の際に取り壊された部分
- 昭和49年に東京都が買収した際に都市公園法に定める許容建築面積率の関係で取り壊された部分
- 現存する建物部分



旧国分寺街道と右手は別邸。表門は手前右手に位置した。

昭和16年(1941)当時の国分寺駅南側と岩崎家別邸別邸の表門は中央線に突き当たる旧国分寺街道(現在の殿ヶ谷戸庭園の東沿いの道)側にあった。(国土地理院提供)

竣工直後の西側外観



南側外観



応接室



食堂(現在も残る)



(写真はいずれも公園文庫蔵)

市民の保存運動に守られた “緑の文化財”

再開発計画により商業地域化案浮上
岩崎家別邸の庭は、江口家時代からの親子二代にわたる庭師によって、芝生から庭木一本一本にいたるまで丹精込めて管理されていた。それは昭和30～40年代も続く。昭和37年(1962)にその別邸は、「殿ヶ谷戸公園」として都市計画公園の決定がなされた。
ところが、当時すでに国分寺駅南口が昭和31年(1956)に開設されており、昭和41年(1966)には南口の再開発計画が構想される。そして、翌42年に当主の彦彌太が亡くなったこともあり計

画は進む。昭和47年(1972)9月には都市計画公園の指定を解除し、商業地域に変更する案が持ち上がるのである。

存続の危機から平成23年に国の名勝商業地域に指定されれば、緑の庭園は消滅してしまう。危機感を覚えた地元住民は、同47年11月に「殿ヶ谷戸公園を守る会」を結成。一般市民をはじめ、学者、文化人、日本自然保護協会、日本野鳥の会など幅広い支援を得て保存運動を展開する。運動は国分寺市はじまって以来の大きなうねりとなった。

「守る会」は国分寺市や東京都へ陳

情・請願を行い、昭和48年(1973)1月には東京都に都立公園として買い上げるよう要望した。こうした運動が実り、東京都は翌49年8月に岩崎家から2.11haを買収。昭和51年6月からの暫定開園をへて、昭和54年(1979)4月に殿ヶ谷戸庭園として正式開園した。
殿ヶ谷戸庭園は平成10年(1998)に東京都の名勝となり、平成23年(2011)には武蔵野の別荘庭園を代表するものとして国の名勝に指定された。



「殿ヶ谷戸公園を守る会」の都への陳情(昭和48年・1973)
広範な市民による「守る会」の精力的な運動は、昭和49年の東京都による岩崎家別邸の買収として実る。(公園文庫蔵)

「殿ヶ谷戸庭園を守る会」の機関誌『緑化通信』



(殿ヶ谷戸庭園蔵)

昭和22年の岩崎家別邸

1947



国分寺駅に南口はなく、別邸のほかは農地だった。別邸の敷地は南側の崖線下を流れる野川近くまであった。(国土地理院提供)



昭和32年の岩崎家別邸

1957



農地は住宅に変わり、前年には国分寺駅南口ができています。別邸敷地の南側が宅地化され、北西角も更地になっているように見える。(国土地理院提供)

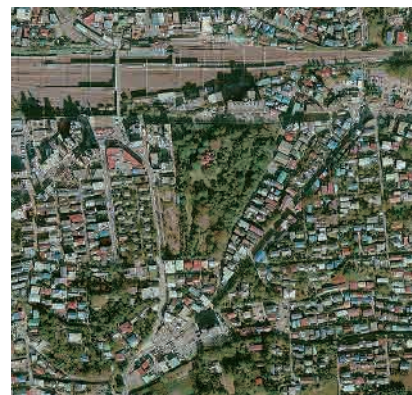


開園した昭和54年の殿ヶ谷戸庭園

1979



かつて別邸の敷地だった南側や北西角をはじめ周囲を密集する住宅に囲まれ、庭園は奇跡のように残る。(国土地理院提供)



殿ヶ谷戸庭園配置図



岩崎家の遺した4庭園とゆかりの地



特別名勝

六義園 (岩崎家駒込別邸)

柳澤吉保が五代將軍徳川綱吉より拝領した地に七年の歳月をかけ、元禄15年(1702)に完成。明治初期に岩崎家が購入し、彌太郎・彌之助が修復したあと別邸とした。昭和13年(1938)に彌太郎の長男久彌により東京市に寄付された。

●所在地/文京区本駒込6-16-3



国指定名勝

殿ヶ谷戸庭園 (岩崎家国分寺別邸)

大正初期に江口定條(のちの満鉄副総裁)の別荘として整備され、昭和4年(1929)に三代社長岩崎久彌の長男彦彌太の別邸となった。昭和40年代に開発で存続の危機に立たされるが、住民運動により守られ都立庭園として保全された。

●所在地/国分寺市南町2-16



国際文化会館

(岩崎小彌太烏居坂本邸)

昭和4年(1929)から昭和20年(1945)に空襲で焼失するまで、四代社長の小彌太郎があつたところ。現在は国際文化会館となっている。小川治兵衛(植治)作庭の庭は岩崎家当時のもの。

●所在地/港区六本木5-11-16



(国際文化会館提供)

静嘉堂文庫・美術館

静嘉堂文庫は岩崎小彌太により父彌之助と本人が収集した和漢の古典籍の収蔵と、研究に供するために大正13年(1924)に建てられた専門図書館。美術館はその隣に平成4年(1992)に開館。敷地には庭園が広がる。

●所在地/世田谷区岡本2-23-1



静嘉堂文庫

東洋文庫

岩崎久彌が中華民国総統府顧問G.E.モリソン氏の蔵書「モリソン文庫」を購入し、大正13年(1924)に設立した東洋学研究に供するための専門図書館。東洋学分野では世界5指に数えられる。

●所在地/文京区本駒込2-28-21



(東洋文庫提供)



(三菱一号館美術館提供)



三菱一号館美術館

三菱一号館は明治27年(1894)、ジョサイア・コンドルの設計で丸の内に建設された初の洋風事務所建築。平成21年(2009)にコンドルの原設計を元に、部材や建築技術など可能な限り忠実に復元。翌年美術館として開館した。

●所在地/千代田区丸の内2-6-2



重要文化財

旧岩崎邸庭園 (岩崎家茅町本邸)

岩崎彌太郎の本邸を受け継いだ、長男で三代社長の久彌が明治29年(1896)に完成させた邸宅。壮麗な洋館は英国人建築家ジョサイア・コンドルの設計にして、コンドルの代表作といわれる。庭は和洋併置式の芝庭。

●所在地/台東区池之端1-3-45

三菱史料館

三菱の歴史に関する史料の収集・保管・公開や、日本の産業発展史の調査・研究を行っている。岩崎彌太郎に始まる三菱の歴史を展示し、ロビーではビデオ上映や小冊子の販売もある。

●文京区湯島4-10-14

清澄庭園 (岩崎家深川別邸)

岩崎彌太郎が閑居藩主久世家屋敷跡に自らの夢を実現して作庭。社員の慰安や賓客接待用の深川親睦園として一応の完成をみたあと、弟彌之助、長男久彌が造園を受け継いだ。大正13年(1924)に久彌により東京市に寄付された。

●所在地/江東区清澄3-3-9



都指定名勝

岩崎家の遺した4庭園とゆかりの地



旧岩崎邸庭園

(岩崎家茅町本邸)

重要文化財

- 所在地 台東区池之端 1-3-45
- 開園年月日 平成13年10月1日
- 開園面積 18,235.47m²
- 交通 東京メトロ千代田線「湯島」(1番出口)から徒歩3分／東京メトロ銀座線「上野広小路」から徒歩10分／都営地下鉄大江戸線「上野御徒町」から徒歩10分／JR山手線・京浜東北線「御徒町」から徒歩15分
- 開園時間 午前9時～午後5時 (入園は午後4時30分まで)
- 休園日 12月29日～1月1日
- 入園料 一般400円、65歳以上200円
※小学生以下及び都内在住・在学の中学生は無料
- 無料公開日 みどりの日(5月4日)、都民の日(10月1日)
- 問合せ ☎03-3823-8340 旧岩崎邸庭園サービスセンター



六義園

(岩崎家駒込別邸)

特別名勝

- 所在地 文京区本駒込 6-16-3
- 開園年月日 昭和13年10月16日
- 開園面積 87,809.41m²
- 交通 JR山手線「駒込」(南口)から徒歩7分／東京メトロ南北線「駒込」(2番出口)から徒歩7分／都営地下鉄三田線「千石」(A3出口)から徒歩10分
- 開園時間 午前9時～午後5時 (入園は午後4時30分まで)
- 休園日 12月29日～1月1日
- 入園料 一般300円、65歳以上150円
※小学生以下及び都内在住・在学の中学生は無料
- 無料公開日 みどりの日(5月4日)、都民の日(10月1日)
- 問合せ ☎03-3941-2222 六義園サービスセンター



清澄庭園

(岩崎家深川別邸)

都指定名勝

- 所在地 江東区清澄 3-3-9
- 開園年月日 昭和7年7月24日
- 開園面積 庭園37,434.32m²
開放公園43,656.95m²
- 交通 都営地下鉄大江戸線・東京メトロ半蔵門線「清澄白河」から徒歩3分
- 開園時間 午前9時～午後5時 (入園は午後4時30分まで)
- 休園日 12月29日～1月1日
- 入園料 一般150円、65歳以上70円
※小学生以下及び都内在住・在学の中学生は無料
- 無料公開日 みどりの日(5月4日)、都民の日(10月1日)
- 問合せ ☎03-3641-5892 清澄庭園サービスセンター



殿ヶ谷戸庭園

(岩崎家国分寺別邸)

国指定名勝

- 所在地 国分寺市南町 2-16
- 開園年月日 昭和54年4月1日
- 開園面積 庭園17,694.12m²
開放公園3,429.47m²
- 交通 JR中央線・西武国分寺線・西武多摩湖線「国分寺」(南口)から徒歩2分
- 開園時間 午前9時～午後5時 (入園は午後4時30分まで)
- 休園日 12月29日～1月1日
- 入園料 一般150円、65歳以上70円
※小学生以下及び都内在住・在学の中学生は無料
- 無料公開日 みどりの日(5月4日)、都民の日(10月1日)
- 問合せ ☎042-324-7991 殿ヶ谷戸庭園サービスセンター

